講演報告：「日本における女子大学の役割について ～神戸女学院大学を事例として～」

―Il ruolo delle università femminili: il caso della Kobe Jogakuin University―

武　田　　好

本稿は、2005年11月25、26日の両日、日本ジェンダー学会とローマ大学東洋研究学部の共催で行われた「欧日ジェンダー研究フォーラム」における口頭発表（イタリア語）の要旨である。同フォーラムは、「日本・EU 市民交流年」を記念し、比較文明論の視点から、特に日本とイタリアにおけるジェンダー問題についての研究交流を図り、両国の文化的・社会的相似性と異質性を比較検討する目的で開催された。いわゆる先進諸国中で、日本とイタリアは、GEM (gender empowerment measurement)、合計特殊出生率がともに低く(1)、両国はグローバルな価値目標であるジェンダー平等の実現に向けて努力することが必要とされている。したがって、日本・イタリア双方の側から現代におけるジェンダー問題を問うとともに、筆者は、「若者たちのジェンダー問題」と題する部門において、イタリアには見られない女子大学の存在を明示し、その現状と今後の役割について神戸女学院大学を事例として報告した(2)。

筆者の目的は、日本女性が置かれてきた歴史的状況を説明することによって、大会参加者の関心を喚起し、また、ローマ大学で日本語・日本文化を学ぶ学生とほぼ同世代の、日本でイタリア語・イタリア文化を学ぶ女子学生をとりまく現状を提示することで、日本の若者のジェンダー観をいくらかでも明らかにすることにあった。日本における女子大学の創設は明治期初頭に遡ること、その歴史を有する神戸女学院大学卒業生の就職率が現在90％を超えること、女子大学の存在意義は、日本の女性文化が持つ歴史的側面に求める必要があるこ

とを述べたかったのである。

歴史的考察、およびアンケート調査結果の分析は、いずれも概論的総括ではあるが、今後、学生たちが、ジェンダー学的視点から、女性が女子大学で学ぶことの意義を考えるための契機としてとらえてくれれば有り難いと思う。本学で教鞭をとった期間に、諸先生方や学生から多々ご教示いただいたことは、誠に貴重な経験であり、女子大学の存在とその歴史を考察することは、日本女性の歴史と女性文化の連綿たる流れを再認識することに他ならないとの確信を持つに至った。また、現代を生きる学生たちと大学生活の意義や女性の将来像について話し合い、飾りのない意見を交換できたことは、一人の女性としてこの上ない光栄かつ幸福な時間であったと実感している。

この場をお借りして、本学の女子大学としての今後の新たな御発展と、学生たちが社会においてより一層の活躍の場と輝かしい未来を手に入れることを心からお祈り申し上げたいと思う。

なお、アンケート調査の実施を快諾してくださった高橋友子先生、ファビオ・サルヴァーニョ先生に感謝の気持ちをここに記するとともに、アンケート調査、およびライフコースの自由討論に協力してくれた学生に御礼を申し上げる次第である。

はじめに

報告者が出講する神戸女学院大学は、日本の関西地区にある二つの大都市、大阪と神戸の間に位置する女子大学です。1875年に創立され、約130年の伝統を有し(3)、数多くの優秀な卒業生を輩出し、日本において知名度の高い大学であると言えます。近年、日本では、女子大学は男女共学化への道を歩む傾向にあり、その数は減少しつつあります。女性のみが学ぶ大学は1998年度には99大学ありましたが、2003年度には大学総数702のうち91大学になりました。内訳は国立２、公立５、私立84です。その理由には、少子化による学生数の減少と、女子中学校、女子高校の共学化が増えたことによって女子大の志願者が減少し

たことが挙げられます(4)。

共学の学生生活を経験した報告者にとって、男子学生と机を並べることはごく普通の情景でありました。まったくの私見ではありますが、一般的に女子大学の学生は視野が狭く、男性に従順で、男性の側から見て望ましい女性像を造り出す場なのではないかと考え、当初は女子大学の存在に対して肯定的ではありませんでした。ところが、実際に教壇に立ち、彼女らと直に接し、その学生生活を目にすることによって、現実の姿とそれまでに自分が抱いていた学生像との間には、大きな隔たりがあることを認識するようになりました。

その理由は、まず、男子学生のいない環境においては、男子に頼らず個々が自分で物を考えることで、前進する力が養われ、勉学に集中しやすいということがあります。また、男子学生のいない学内生活においては、「男が中心的な役割を果たし、女はそれを補助するものである」という旧来の性的役割分業が成立しません。また、大学では、女性学など女性の問題に関連する講座が開講されていますから、学生たちは自分の生き方を直視し、ライフコースを早くから考える機会に多く恵まれます。さらには、「女性らしさ」が尊重され、自由な雰囲気とともに「女性であること」の情緒的特性が保持されていると思われる点が多く見られました。その情緒的特性については、実施したアンケート調査の結果を参考にのちほどお話しますが、結論から申しますと、女子大学の存在理由には、「実践的な学び」と「情緒的な要素を含む学び」が大きく関係すると思われます。そして、日本の女性文化の歴史的な流れとともに、女性が担ってきた文化を育む場として女子大学をとらえる必要性があるのではないかと切に考えるようになりました。

本報告では、女子大学の役割について、日本の女子教育のあり方を概観するとともに、日本の歴史における女性文化の有り様に触れ、今後求められる女子大学像の展望を試みたいと思います。

1．女子大学の現状：女子大学の存在理由について

前述のように女子大学は、共学化を図る大学と別学での生き残りの道を選ぶ大学の２つに分かれるというのが現在の状況ですが、女子大学としての存続を図る女子大の主張する存在理由を概観してみましょう。

神戸女学院大学は、女子大学の存在意義として次の点を挙げています。学生が能力を発揮し、女性としての自分に自信を持つこと、出会いを大切にする少人数教育を施し、キャンパスが女性の感性を育む場となること、女性の教職員や役職者が多く、女性の役割モデルが身近に存在することで女性に向上心を培うこと、学校行事の中や課外活動において、男子に依存することなく、リーダーシップを育て、実践する場が与えられること、などです(5)。

女子大学は、一般的にその存在理由として、「男は仕事、女は家庭」という旧来のステレオタイプ化したジェンダーモデルの概念が残る社会において、その中で自分が自信を持ち、どう生きるかを考える術を与える場としての女子大学の機能を強調しています。要約すると、①女子学生だけの集団で、女性が主体的に活動できる、②小規模校なので、少人数制の教育がなされ、個別指導が行き届く、③男性中心社会の中で女性が自立的に生きていく力を身につけるのに、男性中心教育のシステムが残る共学校よりも適している、以上の３点に絞られます(6)。男性と競争できる力をつけさせるために、男性に求められる資質を、女子集団の中で培う、という論理が中心です。当然のことながら、社会で発揮できる能力を、女子だけの環境で育てることが妥当であるのかという反論が生まれましょうが、それは実社会で活躍する卒業生の存在がよい成功例を示していると言えるでしょう。そこで、男女共同参画社会の実現に結びつく女子教育を考えるために、女子大学の歴史をふり返ってみましょう。

2．女子大学の歴史

1）女子の学校：明治以降

1872年（明治５年）、文部省は「学制」を公布し、女子も男子と同じ教育を受けなければならないと規定しましたが、７年後に学制は廃止され、男女別学となりました。中等学校は女子の高等女学校と男子の中学校に分けられ、男子は中学校卒業後、高等学校・大学に進学できましたが、女子には原則として認められませんでした。男子が学ぶ中学校は就業年数は５年であるのに対し、高等女学校は多くが４年で、家事・裁縫の割合が多く、理数科系は重視されませんでした。

明治に入り開設された女学校は、ミッション系、官立、私立の３つの路線に分かれます。明治初期はミッション系の女学校が多く、キリスト教主義の学校は明治28年（1895年）までに65校、官立、公立の高等女学校というのは25校でしたから、当初、女子の学校教育は宣教師たちによって進められたといってよいでしょう(7)。キリシタン禁止令が解けてまだ間もない頃、まだ男尊女卑が厳しい時代にキリスト教の女性観を持って学校が創立されたことは特筆に値します。神戸女学院大学（Kobe School）もその一つです。

明治20年代になると、男尊女卑の思想が再び強くなり、ナショナリズムの影響で良妻賢母の思想が近代国家の要請の中で成立し、固定化していきます。明治末には、民法の規定する「家制度」は、日本全体が天皇を家長とするひとつの家族であるという「家族国家観」と一体化し、女子教育もまた、その家制度を支える良妻賢母の育成を教育理念の中心に置きました(8)。

大正時代になると、高等女学校に接続する大学を設置することも検討されましたが、時期尚早であるとされ、高等女学校には専攻科・高等科を設けることになりました。

日米戦争が終結した後の1945年にようやく「男女共学、教育の機会均等、女性に対する高等教育機関の開放」が認められます。多くの新制大学が発足した

のは終戦後の1949年のことですが、1948年には12校の大学が認可され、そのうちの５校が女子校（津田塾、日本女子、東京女子、聖心女子、神戸女学院）だったことは注目されます。

1964，５年頃から、特性教育のコースとして作られた短大の数が増加し、そのほとんどが女子校で「花嫁学校」的存在となりました。「男は４年生、女は短大」の時代の到来です。しかしながら、90年代から男子も女子も４年生大学へ進む傾向が上昇します。2005年度の大学進学率は、男子が49.3％、女子が35.2％です（女性全体の13.5％が短大に進学するから女子の大学進学率は48.7％）。1985年の大学進学率は男子が38.6％、女子が13.7％（短大は20.8％）でした(9)。

戦後、男女共学は、女子の教育レベルを男子なみに引き上げることを目的として、また、男女の教育機会の均等を実現する手段として実施されました。女子のための学校のあり方は、このように時代の趨勢とともに変化していったのです。女子の学校が創設されたのは明治時代に入ってからのことでした。しかし、日本の女性は明治以前に教育をまったく与えられなかったわけではありません。

２）日本の歴史における女性の教育

先の先生方のお話にもありましたように、日本には、平安時代の紫式部や清少納言のような文学者を輩出し、女流文学が花開いた時代がありました。女房たちは男性と同様に、地位に応じた位と正式な名前を持ち、芸と教養を身につけていました。人間の心の動きを記し、平仮名で書かれた日記を残し、それは後世の教養ある人の必読書となりました(10)。

中世の貴族や上級の武士の子女は、寺やあるいは家で師につかえ、手習い、道徳書、往来物や和歌を学び、音楽・裁縫もたしなむのが普通でした。身の回りの道具類を美しく整えること、身だしなみなどが要求され、武家の女は武芸も必要とされました。また、庶民も手習い、裁縫を重視し、寺子屋では庶民の

子どもたちは男児も女児も一緒になって読み・書き・そろばんを習いました。二百数十年間、戦争のない平和な時代が続いた江戸時代には、公家や上級武士のものであった和歌を庶民階級も学ぶようになり、日記を綴る女性たちが各地に見られました。江戸では女性も平仮名はほとんどの人が読めたということですし、知識階級の妻や娘の中には漢詩という男性的な文学形式に進出していった女性も存在し、彼女たちは知識人と交わりながら、知識や思想を身につけるとともに、政治的見識を認められました。たとえば、全国的な規模で採用される詩の専門書「五山堂詩話」(1807-32) には十数名の女性の漢詩詩人が名を連ねています[11]。このように日本の女性文化には千年以上にわたる教養の歴史があり、知識階級の日本女性は「文の力」を有し、「書く行為」によって社会参加してきたことを忘れてはなりません。庶民のレベルにおいても学ぶ女性の姿は珍しくありませんでした。江戸の武家社会から明治の近代国家へと社会の構造が大きく変化した時代に、女子のための学校が創設されたとき、女学校に進んだのは皇族・士族エリート・地主たちの娘でした。明治以前からの女性の教養と文化は、彼女たちを通じて継承されていったのです。

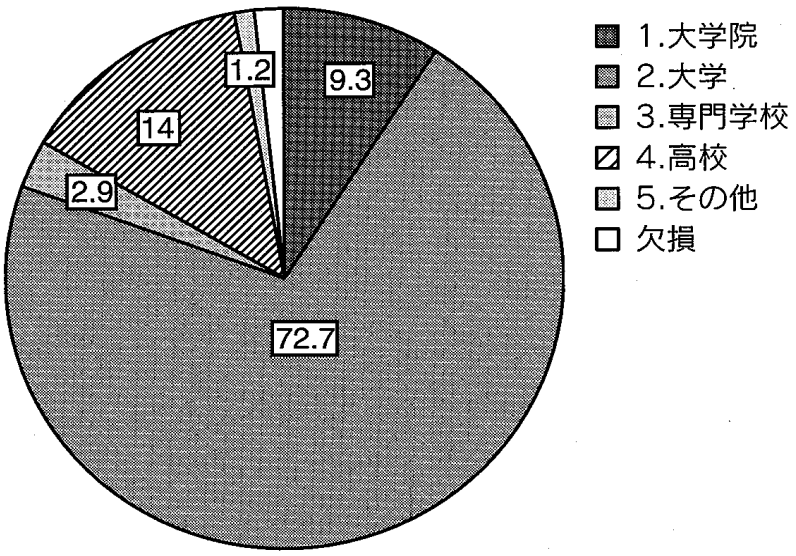
3．アンケート調査にみる女子学生の意識

1）アンケート調査：就業意欲

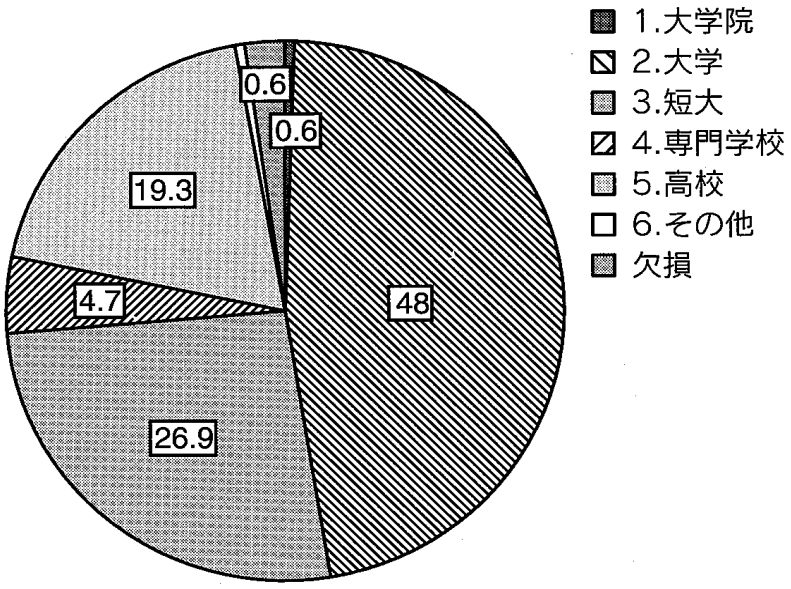
では、2005年10月に神戸女学院大学のイタリア語・イタリア文化関連科目クラスにおいて実施したアンケート調査の結果を参考にして、本学学生の意識傾向がどのようなものであるかを見ていきたいと思います。サンプル数は175ですから（学生総数2635名)、十分な数ではありませんが、おおよその傾向をみることができると思いますのでご覧ください。

まず特色は、ご覧のように両親の教育レベルが高いことです。両親の最終学歴は、大学卒以上の最終学歴を持つ父親は80％を越え、母親については48％が大学卒、26.9％が短大卒です（図表１)。日本において短大が多く作られ、ちょうど「男は４年生大学、女は短大」という時代に学生生活を過ごした世代であ

（図表１）



父親の最終学歴

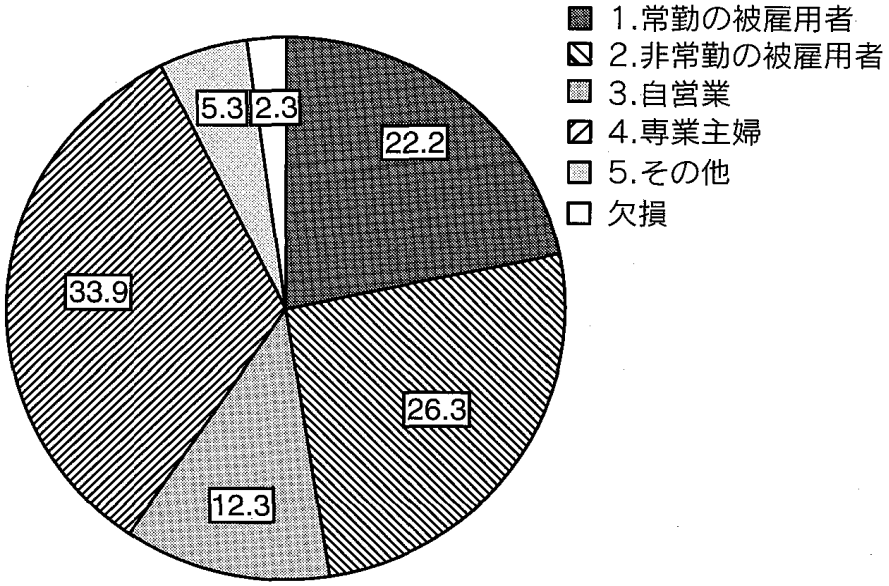


母親の最終学歴

ることが推測されます。次に、母親が専業主婦である割合は33.9％で、常勤・非常勤の被雇用者である割合は48.5％です。約半数が働く母親であり、約３分の１が専業主婦ということになります（図表２）。

そこで、「将来の理想の働き方」（働くつもりはない／結婚するまで働く／子

（図表２）

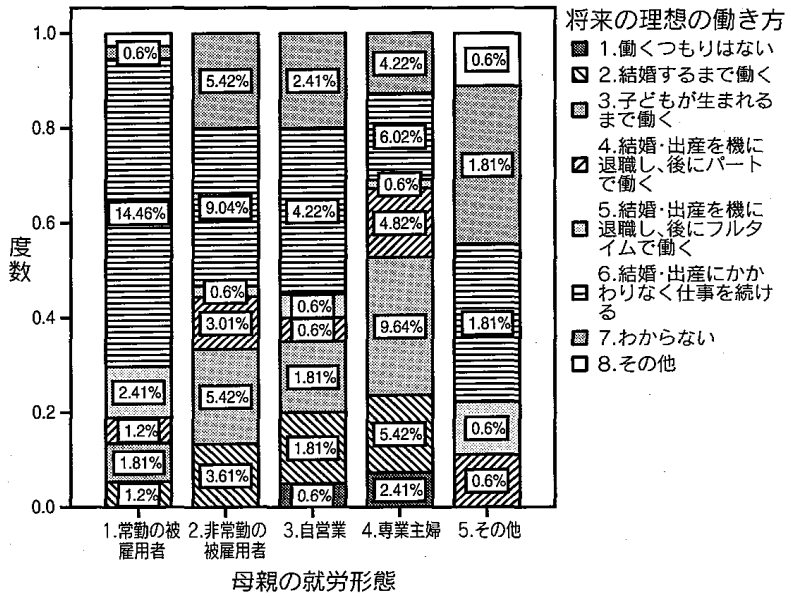


母親の就労形態

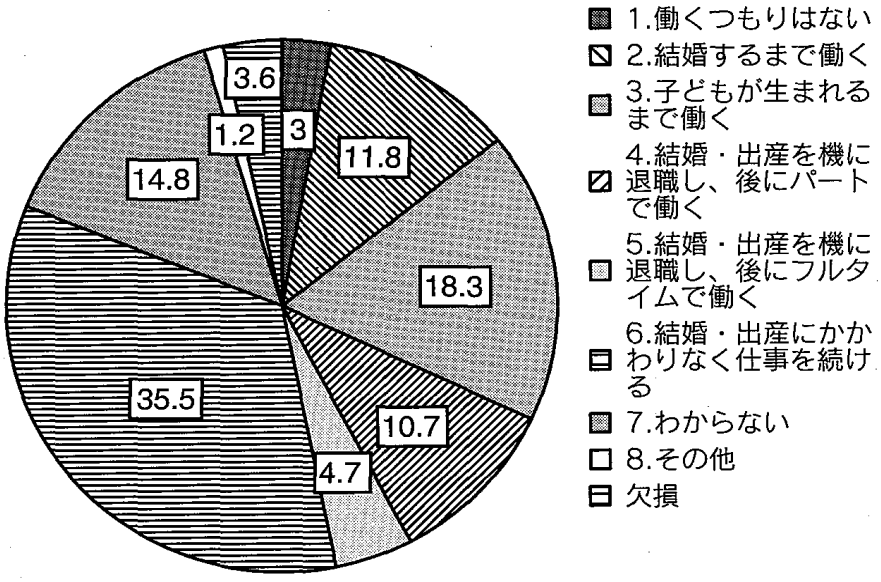
どもが生まれるまで働く／結婚・出産を機に退職し後にパートで働く／結婚・出産を機に退職し後にフルタイムで働く／結婚・出産にかかわりなく仕事を続ける／わからない／その他）と「母親の就労形態」をクロス集計した結果を見てみましょう（図表３）。母親が常勤の被雇用者である場合、「結婚・出産にかかわりなく仕事を続ける」を選ぶ割合が多く、専業主婦を母に持つ場合は、その割合が最も低いことがわかります。母親が専業主婦の場合は、「働くつもりはない」を選ぶ者が存在します。母親の就労形態が娘の将来の働き方に与える影響は少なくないと言えるでしょう。

全体でみると、「将来の理想の働き方」は、「結婚・出産にかかわりなく仕事を続ける」が最も多く35.6%、「子どもが生まれるまで働く」18.3%、「結婚するまで働く」11.8%、「結婚・出産を機に退職し、後にパートで働く」10.7%、「結婚・出産を機に退職し後にフルタイムで働く」4.7%、「わからない」14.8%、「働くつもりはない」は３%でした（図表４）。結婚・出産後に復帰する者は15.4%、結婚・出産を期に仕事をやめる者は30.1%です。日本に特有のM字型（結婚・出産により女性の労働力率が下がり、子育てが終わったあと

（図表３）



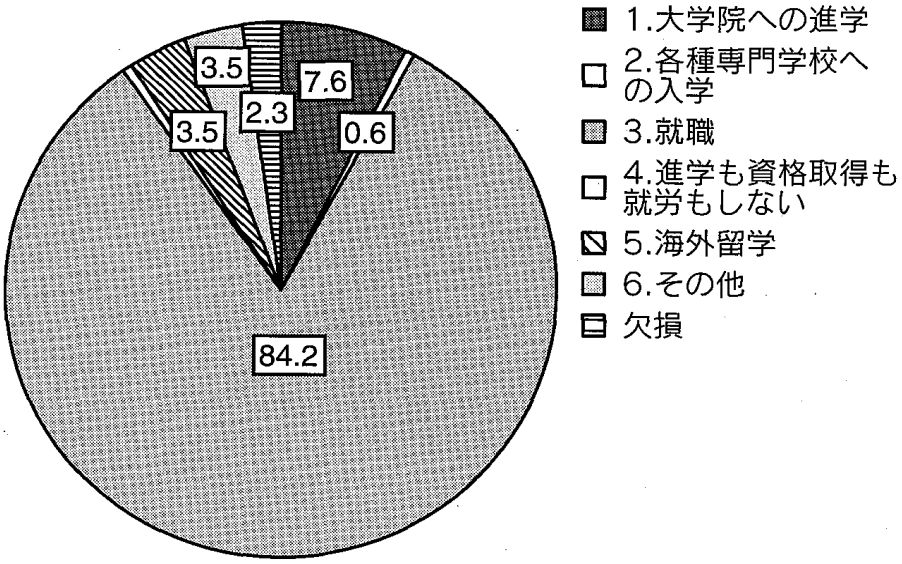
（図表４）



将来の理想の働き方

復職するため年齢別労働力率がＭ字カーブを描く）就労の予備軍であることがわかります。全体の84.2％が卒業後就職することを希望していますが（図表５）、同時に３分の１は就職しても将来「専業主婦」となることを容認してい

（図表５）

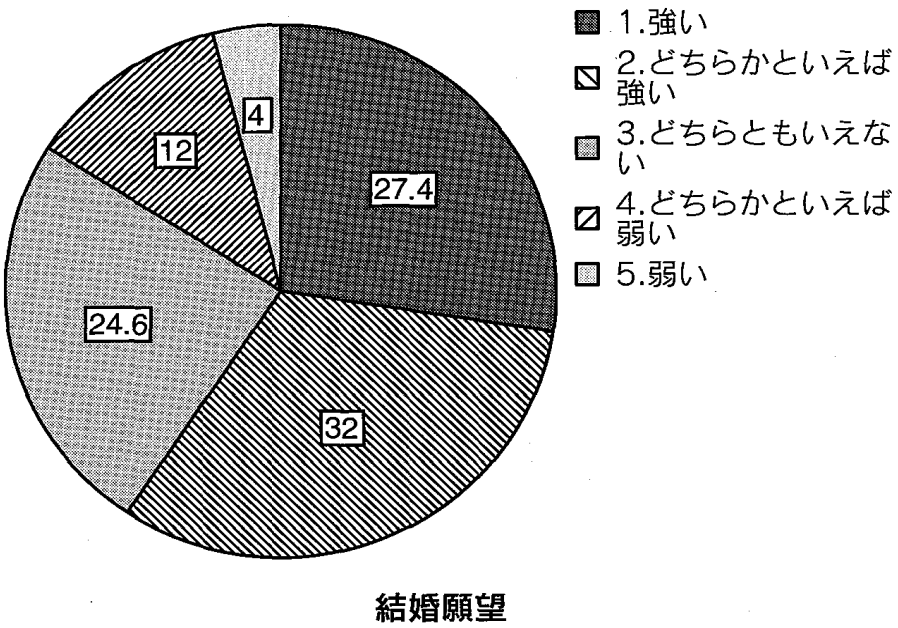


大学卒業後の進路希望

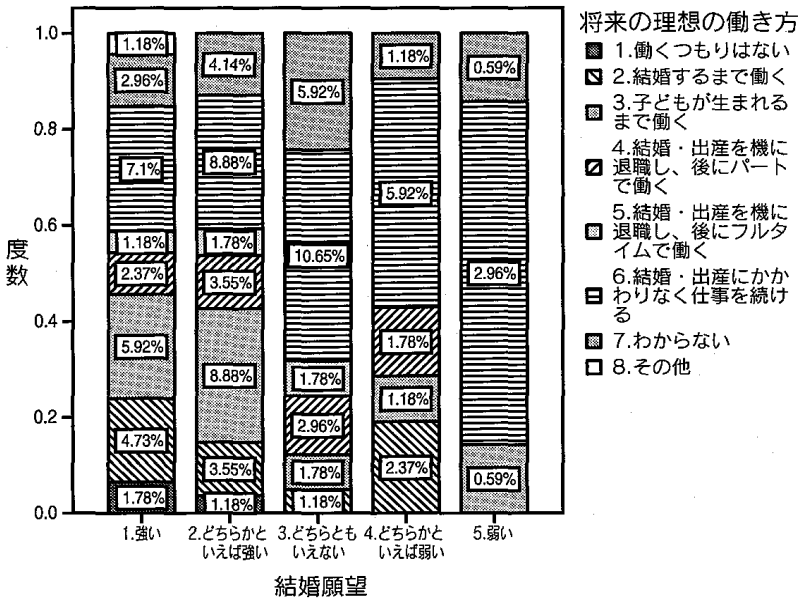
る点が注目されます。2004年度卒業生の実際の就職決定率は89.2％で約９割の学生は就職しました。

さて、「結婚願望」については、「強い」「どちらかといえば強い」を合わせると約60％で、「どちらかといえば弱い」「弱い」は合わせても16％にすぎません（図表６）。「結婚願望」と「将来の理想の働き方」とのクロス集計結果からわかることは、「結婚願望が弱い」者は「結婚・出産にかかわりなく仕事を続ける」割合が最も高く、逆に「結婚願望が強い」「どちらかといえば強い」場合は、仕事をやめるか、後にパートで働く（家事・育児に負担とならない労働に就く）者が半数に上るということです（図表７）。「母親の就労形態」と「結婚願望」のクロス集計の結果を見てみましょう（図表８）。母親が常勤の被雇用者である場合に結婚願望の数値は最も低いことがわかります。母親が専業主婦の場合は、「結婚願望が強い」「どちらかといえば強い」が７割近くを占めています。母親の就労形態が女子学生の結婚願望に与える影響は少なくないと言えるでしょう。

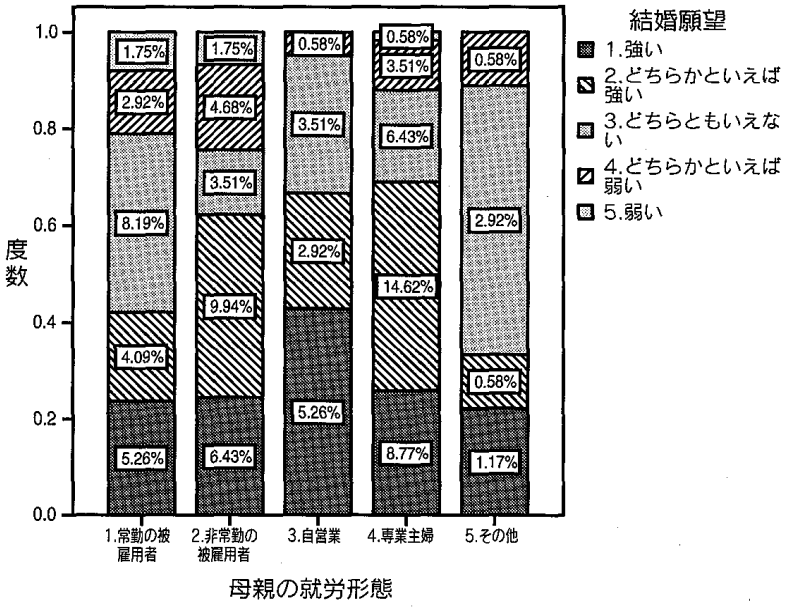
（図表６）


1.強い
2.どちらかといえば強い
3.どちらともいえない
4.どちらかといえば弱い
5.弱い
27.4
32
24.6
12
4
結婚願望

（図表７）


将来の理想の働き方
1.働くつもりはない
2.結婚するまで働く
3.子どもが生まれるまで働く
4.結婚・出産を機に退職し、後にパートで働く
5.結婚・出産を機に退職し、後にフルタイムで働く
6.結婚・出産にかかわりなく仕事を続ける
7.わからない
8.その他
度数
1.0
0.8
0.6
0.4
0.2
0.0
1.18%
2.96%
7.1%
1.18%
2.37%
5.92%
4.73%
1.78%
4.14%
8.88%
1.78%
3.55%
8.88%
3.55%
1.18%
5.92%
10.65%
1.78%
2.96%
1.78%
1.18%
1.18%
5.92%
1.78%
1.18%
2.37%
0.59%
2.96%
0.59%
1.強い
2.どちらかといえば強い
3.どちらともいえない
4.どちらかといえば弱い
5.弱い
結婚願望

（図表８）



2）ライフコース選択：現実に即応した生き方

彼女らのライフコース選択について、イタリア語Ⅱを選択する15名のクラスで具体的に自由討論する機会を持ちました(12)。その中で明らかになったことがあります。彼女らの理想とする人生は「結婚し出産する、仕事を持ち続ける」タイプで、なりそうな人生は「結婚し出産する、出産で仕事を離れ、子どもが一定の年齢に達したら再び仕事につく」タイプであるということでした。理想と現実が異なることをすでに認識し、最初に就いた仕事を継続する意志は強固ではなく、結婚・出産などによって２、３回仕事を変わることを想定しています。そして仕事を見つけるときに有利なスキル・資格を身につけるのが学生生活においてやるべきことなのだと主張します。その理由は、社会で男女は対等でないから「男は仕事、女は家庭」という性的役割分業をある程度容認せざるをえないし、男性にも家事労働を分担してほしいが、その役割配分、バランスは二人の間で決めればよい、という意見でした。驚いたことに、父親を通して見た社会における男女の立場を、職場における諸待遇（賃金、労働時間等）を考慮しつつ平等ではないと認識していました。しかしながら、女性の家庭内労

働の負担が大きいことについては非常に寛容でした。このような意見を持つ彼女たちは自分の家庭を顧みて、父親の働き方を見て父親に家庭内労働を分担させることは非現実的であると考えたのです。女子学生のライフコース選択の要因について考察するには、父親の労働時間や家事労働分担の状況、家庭におけるジェンダー観について、調査し分析する必要があると思われます。

自由討論に参加した学生の中には、「性別役割分業」を、肯定的であれ、批判的であれ、いずれにせよ受けいれている者が多くいました。彼女らは、「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」ことをただ単に否定するのではなく、むしろ、自分にとって好ましい性別役割分業を実現するために、現実社会に即応できる力を身につけようとしているのです。

4．女子大学に望まれること

1）「すぐれた女性の育成」とは

本学では少人数教育・専門教育を充実することによってキャリア継続のための資格・能力開発が行なわれています。また、同じ西宮市内の７つの大学との単位互換認定システムが機能し、公共施設等で行われる他大学との共通講座を受講することもできます。他大学の男子学生との交流は可能であり、「一般男子学生との出会いが少ない」（62.0%）「視野が狭い」（35.4%）という、女子大学に対して一般的に考えられるよくない点は解消されつつあります(13)。また、海外留学制度（米・英・中・韓）が整えられ、文化交流が図られるとともに、日本文化を発信する機会としても活用されています。今後も増加傾向にある留学希望者は、これを伝統文化を継承する場、文化を発信する教育の場であると自覚し、派遣校側にもさらにそのための関連講座を充実させることが必要とされるでしょう。同時に、日本の女性文化の歴史を学び、それを海外へ伝える努力が一層なされるべきでありましょう。男性がいない環境で学ぶ意味の一つとして、人間であり、個人である学生個々がfemininityを歴史的に検証し、学際的に学ぶこと提唱しておきたいと思います。報告者は、学生が留学生活な

どの国外滞在時において、自らの文化的アイデンティティと対峙する機会を得たときに、自分たちの女性文化に対する理解が不足していることに気づいたと主張する姿に幾度となく接しました。

さて、女子大学のよさについて、「男性に依存せず自立した学生生活を送ることができる」(79.4%)、「女性同士でいると気が楽である」(76.0%)、「男性の視線を気にせず勉強に集中できる」(66.3%) がいずれも過半数を超え、男性の存在がそばにないことによる心理的な解放を挙げる者が多くいました。異性がいる場合には、心理的緊張が生じ、リラックスできないといいます。たとえば、一人で食事をするとか、図書館で勉強をすることには何ら抵抗を感じないが、異性の学生がいると、その存在が気になるか、あるいは、自分が一人でいることを変に思われるのではないかと案じてしまうといいます。女子大学のよさとは「気が楽」であることの他に、「環境のよさ」「よい友人ができる」など、数値では図りにくい情緒的なものが多いことも、最後につけ加えておきたいと思います。男子の存在から守られた環境で、男子と同等に社会に参画する力をつけるというのは一見矛盾しているように思われますが、彼女らの感性や情緒が守られる教育環境作りは、女子大学に求められる重要な要素であると言えるでしょう(14)。

2）女性文化の継承者として

アンケート調査の結果、および学生の意見・討論から明らかになった、女子学生の考える femininity の要素のひとつに、「子どもを生み、育てる」文化を有しながら、「個人の能力を生かした仕事につく」ことを理想とし、その実現のために協力し合えるパートナーとの暮らしを営むことが挙げられました。それは、女性が必ずしも男性並み（日本男性であることを注記しておきます）の労働をこなし、男性の生き方に同化、同調することを意味するのではありません。現実的に家族のあり方や幸せを考え、「女性本来の役割を評価する女性」です。旧来の女性の役割分業に対して寛容な意見を持つ彼女たちが、幸せな表情

でそれを語るとすれば、それは身近なモデルである母親の生き方が満足できるものであるからであり、また母親が幸せであると思えるからです。この幸せ度、満足感というものをデータで示すのは非常に難しいことであると報告者は考えます(15)。「日常生活の心の機微を大切にする」「家の中でゆったりとした時間を過ごす」「家＝おいしい食事・整えられた家・家族とゆるやかに過ごす時間を持つ場所」という家を守るための教養は、もちろん、男女の別にかかわらず幸福な生活を営むのに不可欠でありましょう。その中で、女性らしさ、優しさ、包容という極めて叙情的な特質は、女性に特化するのでなく、個人の特性として育まれることが望ましいでしょう。仕事に就かない場合にも、「専業主婦」として生きる幸せがあることを、それを支持する彼女たちの言動や行動から理解することができました。ただし、ここで注意しなければならないのは、彼女らが求める家庭マネージメントの能力とは、高度成長期の日本を支えた主婦とは異なり、多様な家庭像、たとえば少子・高齢社会に対応する主婦像の構築です。「専業主婦」になるためには必ずしも高度な教育を受けなくてもよい、女子は男子の進学の邪魔であると考えられた40年前の社会状況とは異なります。したがって、専門職・キャリア志向の女性にも、家庭婦人・教養婦人志向の女性にも対応できる本学のあり方は、女子大学として非常に理想的であるといえます。

女子大学は、その存在理由を歴史的に男子の教育システム、男子の教育レベルに左右されてきました。女子大学が「すぐれた女性」を育成するのであれば、「すぐれた男性」を育成する場を求めることも必要でしょう。女子大学の存在については論議されますが、男性の教育について語られることは決して多くはありません。女子大学の存在意義を問い直すためには、日本の女性文化の歴史の継承者として女子大学の存在を考える必要があることと、それは今日の男子の教育のあり方を問うことにもつながり、人間社会に幸福をもたらす男女共同参画社会における教育を考える契機であることを主張しておきたいと思います。

注

（1）　2004年度の合計特殊出生率は日本1.29がであるのに対してイタリアは1.33を示し（http://www.mhlw.go.jp/hakusho/kousei/05/dl/1-1b.pdf　厚生労働白書平成17年度版による）、GEM（ジェンダー・エンパワーメント指数）は78か国中、日本が38位、イタリアは32位である（男女共同参画白書平成17年度版による）。

（2）　同フォーラムには、ローマ大学のみならず、日本語・日本文化を研究する他大学の教員、および学生、ジェンダー学や女性問題等の研究者、ジャーナリストら約150名が参加した。大会初日の11月24日、イタリアでゼネラル・ストライキが実施され、現地での移動は困難を極めたが、それにもかかわらず多くの参加者を得られたのは、ひとえに大会開催者と参加者双方の熱意と尽力の賜物であると思われる。

（3）　神戸女学院大学の沿革、および現況については『神戸女学院大学 College　Guide 2003』、および『神戸女学院百年史　各論』（昭和56年発行）を参照した。なお、Kobe　College（神戸女学院大学）の英語表記はイタリア語の collegio（寄宿学校）を想起させる可能性があるので、あえて Kobe Jogakuin University とした。

（4）　「2004.10.14消える女子大」（朝日新聞 http://www.asahi.com/より）

（5）　平安女学院大学企画広報委員会『いま、なぜ女子大学か　女子高等教育の新しい役割』三学出版、2000年、14-15頁、26-27頁。

（6）　利谷信義他『高学歴時代の女性　女子大学からのメッセージ』有斐閣選書、1996年、31頁。

（7）　女子教育の歴史については、池田諭『女子大学』日本経済新聞社、1966年、金森トシエ・藤井治枝『女の教育100年』三省堂選書、1977年を参照。

（8）　「女性が責任をおうべき家事・育児・内助などは、たとえ家庭において行われる役割であるとしても、単に家庭にとってだけでなく、国家の発展にとっても重要な意義ともつものと価値づけられていた。つまり、男が直接的に生産活動や兵役に従事することによって近代国家の国民となるのと異なり、女はその男の活動を家庭にあって支え、次の世代を育てていくことによって、間接的に国民としてとらえられ、国民統合されていたのである。そしてそれを合理化する思想が良妻賢母思想であった」小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1992年、234頁。良妻賢母思想の成立については本書第１章を参照。

（9）　内閣府男女共同参画局『男女共同参画白書』（平成17年度版）、95頁図表「学校種類別進学率の推移」。

（10）　総合女性史研究会『日本女性の歴史　文化と思想』角川選書、1993年、90頁。

(11)　関民子『江戸後期の女性たち』亜紀書房、1980年、174，203頁。

(12)　女性のライフコース選択については、次の８タイプから実際になりそうなタイプ、あるいは実際に選択しているタイプを選ばせた。タイプ１：結婚しない、仕事をもち続ける／タイプ２：結婚し、出産しない。仕事をもち続ける／タイプ３：結婚し出産する。仕事をもち続ける／タイプ４：結婚し出産する。出産で仕事をやめる／タイプ５：結婚し出産する。結婚で仕事をやめる／タイプ６：結婚し出産する。出産で仕事を離れ、子供が一定の年齢に達したら再び仕事につく／タイプ７：結婚し出産する。結婚で仕事を離れ、子供が一定の年齢に達したら再び仕事につく／タイプ８：結婚し出産する。仕事につかない（資料出所：経済企画庁国民生活局『新しい女性の生き方を求めて』1987年）。

(13)　女子大学のよい点（女性同士でいると気が楽である／女性の友人との友情を育みやすい／男性の視線を気にせず勉強に集中できる／男性に依存せず自立した学生生活を送ることができる／女子大ならではの講座を受けることができる／おしゃれを自由に楽しめる／卒業生、先輩、教員に自分のライフスタイルのモデル、理想となる女性がいる／その他）、女子大学のよくない点（一般男子学生との出会いの場が少ない／女子中心の行動ばかり見るので視野が狭くなるように思う／自分から求めないと他校との交流の機会がない／学内活動で力仕事が必要なときに困る／男性教員が女子学生に対して甘いときがあると思う／ファッションの流行に気を遣ってしまう／男性に対する競争心を持ちにくい／共学校でないので同世代の男子学生の考え方やライフスタイルがわからない／その他）（いずれも報告者作成）のあてはまるものに○をつける設問を設けた。

(14)　杉田孝夫氏は、「共学校が男性中心社会の規範から脱し、真に男女共同参画社会の内実にふさわしいものになっていったとき、再度女子大学の存在理由は問われることになるだろう。はたして、そのとき、女子大学は固有の存在理由をもちえるだろうか。だが今後しばらくは、女子大学は、そういう時期が早く到来するようになるために存在する必要があるといえるのかもしれない」と述べている。（前掲書『高学歴時代の女性』31-32頁）

(15)　日本人の考える「幸福感」について、「幸せ」というあいまいな概念を経済学的、社会学的な観点から数値化した研究結果が、大阪大学社会経済学研究所の行ったアンケートによって示されている。「産経新聞2005年11月18日付」。個人のライフコース選択にはこの「幸福感」が大きく影響することは間違いないだろう。

その他の参考文献

小山静子他『戦後公教育の成立』世織書房、2005年
天野正子、木村涼子『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社、2003年
神田道子『女子学生の職業意識』勁草書房、2000年
木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房、1999年
中西祐子『ジェンダー・トラック　青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社、1998年
深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房、1998年
日本女子大学「衣の会」『女子大生よはばたけ　21世紀につなぐメッセージ』ドメス出版、1996年
日本女子大学女子教育研究所編『女子大学論　女子教育研究双書⑩』ドメス出版、1995年
橋本紀子『男女共学制の史的研究』大月書店、1992年
村田鈴子『教育女性学入門』新山社出版、1990年
天野正子他『女子高等教育の座標』垣内出版、1986年
五十嵐富夫『日本女性文化史』吾妻書館、1984年
冨士谷あつ子、上杉孝實『大卒女性100万人時代』勁草書房、1982年
冨士谷あつ子『高学歴女性の就業に関する意識調査』トヨタ財団助成研究報告書、1980年